

沼津市若山牧水記念館

第24号

2000. 3. 20

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL (0559) 62-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 FAX (0559) 62-0424

多摩川の砂にたんぼぼ咲くころは われにもおもふ人のあれかし 牧水

平成十一年の六月、「たんぼぼの歌」の半切を牧水記念館の収蔵品の一つとすることができた。歌集『路上』には「海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の恋しかりけり」をはじめ、「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり」などの名歌が載るが、中でも牧水の当時の心境を最もよく表しているものとして、このたんぼぼの作品は印象的な歌である。

明治四十四年二月頃、気分転換にでもと郊外に出て、二子玉川付近で遊んだ時に作った歌である。私事で恐れ入るが、二子玉川あたりは私が小学校一年生の頃遊んだ場所、明るく広々とした河原が広がっていた。牧水の歌はそれより三十年も前に詠んだものであるが、私の子供時代とあまり変化のない風景であったのではないかと思ひ、私にとって往時を懐かしむよすがとなる歌でもある。

牧水は前年の九月初めから十一月の半ばまで信州に疲れた身心を休めており、その後帰京して園田小枝子との恋の後始末に奔走していた。身辺の整理もつかず、さらに母の病気を理由にした帰省の催促がしきりで、たんぼぼの歌の前に置かれている「瀬もあさく藍もうすらに多摩川のながれてありぬ憂しや二月は」の歌にあるように、「憂しや二月は」の感慨に満ちていた。「多摩川の



浅き流れに石なげてあそべば濡るるわがたもとかな」の歌からもその憂鬱の感は分かるうか。この頃の一連の作品の中の一首が、このたんぼぼの歌であることは注目に値する。

今は暗くうら枯れた河原だが、春もたけなわになって、この砂地にたんぼぼの花が咲く頃には、自分にも新しい恋人がいるだろう、いて欲しいというこの作品には、明るい未来への希求が詠嘆されている。田辺聖子氏はその著書『文車日記』の中で、この歌に触れ、「こういう歌を少女時代によむと、一つの歌だけで、一時間も、ぼんやり、いろいろ考えごとができるのでした。」と書いています。納得させられる感想であろうか。

牧水はたんぼぼの咲く頃をはるか過ぎた七月、歌人太田水穂宅で、上京していたその遠縁にあたる太田喜志子と運命的な出会いをする。そして次の年の四月、長野県筑摩郡広丘村の実家に帰っていた喜志子に結婚の申し込みをするのだ。まさに「われにもおもふ人のあれかし」の実現であった。半切は花を紋様にデザインされた小紋を散らした茶の条幅に表装されて落ち着いた趣きを見せてくれる。文字は比較的落ち着いた作風で各地で行われた頒布会の際のものと考えられる。頒布会で協力した誰かの手から、ゆかりの牧水記念館に収めたこの「たんぼぼの歌」に、その歴史をたどるのも一興であろう。

なお、この歌の歌碑が東京の多摩川河畔に建てられ、東京牧水会のメンバーによって大切に守られていると聞く。

(須永 秀生)

伊豆の下田と土肥に新たに建立

牧水歌碑除幕を祝す

平成十一年十一月十四日、下田市の神子元島を望む小高い松林の一角に、この灯台を歌った若山牧水と「アララギ」同人の近藤芳美の歌が同じ碑面に刻

まれた歌碑が建立され、地元吉佐美地区の皆さんや小学生が出席して除幕式がとり行われました。また、十一月十一日には、土肥の松原公園に建て

られた牧水歌碑と胸像の除幕式がありました。土肥町観光協会主催の式典には、静岡県や土肥町役場、議会、教育関係者のほか、沼津牧水会会員をはじめ、牧水の生誕地宮崎県東郷町や、牧水が「幾山河」を詠んだ地岡山県哲西町、東京牧水会、横須賀市北下浦観光協会など全国の牧水顕彰団体の方々が多数出席し、その後の懇親会も和やかに行われました。両歌碑の除幕式における榎本望子館長の挨拶を紹介いたします。

牧水と近藤芳美 二人の歌が一つに 下田

本日は近藤芳美先生と、祖父牧水の歌が同じ碑面に刻まれた、記念すべき除幕式にお招きいただき、有難うございます。

この歌碑建立のお話は発起人であられる土屋寛様より伺いまして私の心の中でいろいろな思いが膨らみ、今日を楽しみにしておりました。

近藤先生が昭和四十九年、下田において詠まれたお歌と、大正二年に祖父牧水が詠んだ歌、その間に六十年の歳月が流れながらもなお健在の神子元島灯台の歌二首が歌碑という形で建立され、只今除幕された碑面を拝見し、感慨無量でございます。

牧水は中学で地理を習い始めた頃、いつかは行ってみたいと思った三つの港があって、それは九州の島原、山形の酒田、そしてこの下田であったそうでございます。

今から約百年前の明治三十年頃に九州で学んでいた牧水が、今の距離感とおおよそ違ったであろう下田の港に抱いた憧れは、その後の牧水の人生の原点を見る思いがいたします。

大正二年十月二十六日、東京の霊岸島から船出して、嵐の中を命からがら下田に到着、早稲田時代の友人を神子元島の灯台に訪ねた情熱は幼い頃の憧れに動かされたものでもあったのかと…そしてまた、その友人の「灯台守にならないか」との誘いに心を動かされもした牧水…。思えば人生の岐路の一つとも云えるこの地であつたわけで、

蟹めくと譬へられにし溶岩の神子元島は沖に真赤し

闇空にひそめる雲を灯台の灯がめぐり来て照らしては過ぐ、

昭和五十五年、こちらへ伺った私の父旅人が詠みました歌ですが、父もまた深い感慨でこの地に立つたと存じます。

その父も昨年他界いたしました。近藤先生には歌人協会等でご厚誼を頂いておりましたので、父親である牧水の思い入れ多い下田に近藤先生との歌碑を建てていただいで、生きておりますればどんなにか有り難く思ったことでしょうか。私どもも光栄に存じております。

また、この歌碑は郷土のよみがえりの一つとし

て建立されたと伺っております。

そのよみがえりへの思いを、一人一石運動として小学生が歌碑の台石を運んで下さったとのこと、この下田市吉佐美に寄せる市民の方々の心を御子達にその様な形であらわされたことに、より深い感動を覚えました。

何時も思うのですが、何をする場合にも若い方々殊に将来を担う子供達の参加によって未来につながれて行く大きな大きな広がりが見られると思っております。

心の荒廃が言われるこの頃に、郷土のよみがえりに小学生の参加を呼びかけられ、この様な形で郷土愛の種を蒔かれた「神子元島文学碑建立会」の皆様、並びに先生方に心から敬意を表したいと存じます。近藤先生と牧水のこの歌碑が、その一つを担わせていただけた今日の日にかからの感動と感謝を申し上げて、ご挨拶いたします。

友が守る燈台はあはれわだ中の蟹めく岩に白く立ち居り
若山牧水

沖の燈台めくれば光る磯波に歩みて未明のとき流れつつ
近藤芳美

牧水歌碑と胸像が並ぶ

土肥

本日は牧水歌碑並びに胸像の除幕式に参列させていただきます、有難うございます。

土肥には今までに牧水の歌碑が四基あり、そのどれもが意匠を凝らしたのですが、この度は歌碑と並んで胸像が建てられると伺って、とても楽しみにしておりました。只今除幕された牧水晩年の手になる梅の歌、また、牧水の胸像を深い感慨で拝見いたしました。

この歌はこの度色々ご尽力いただいた、土肥館の野毛様よりのものと伺いました。全歌集にもなく、また数回にも及んだ土肥滞在の最後の歌と思われまふ。

牧水は梅の花には特別な思いを持っていたらしく、梅の花の咲く頃にはきまって寂しさに真向かうことになり、心は反対に澄み通って行くと思っておりますが、牧水の愛読した万葉集のうらうらと照れる春日に雲雀あがり情かなしもひとりし思へば

大伴家持の歌や、牧水自身の「幾山河」の寂しさに通ずる、詩人のもつ心の陰翳だったのではないのでしょうか。そのためにか、土肥では心にしみる歌をたくさん詠んでおります。梅の初花を見たいと、梅の花季に度々土肥を訪れていた牧水が、大正十四年、初めて五月に訪れて詠んだのがこの歌碑の歌で、牧水生涯の内、梅の歌は百首余りありますが、梅の実をうたったのはこの歌のみのようでございます。

牧水にとって土肥は現実の様々なことから逃れたいときの、母の懐のような地だったのではないのでしょうか。ただ、実際にはなかなか一人になる

ことが出来ず、人が来るとお酒になり、土肥館の先代の女将などには随分ご迷惑をおかけしたやに聞いております。亡くなる三年前、最後に訪れた土肥館のために梅の実の歌を残していたということは、象徴的なことと申せましょうか。

今、牧水の眠る沼津乗運寺には梅の木が沢山あり、お墓の脇にも紅梅白梅が見られます。牧水に引導を渡した先々代のご住職は、梅を大変愛されまして「樑(梅)樹」と号されました。これも不思議なご縁と思います。

また、彫刻家奥村良弘氏によるこの胸像は、牧水誕生の地東郷町の牧水公園に生誕百年を記念して建立された牧水像と一連の作で、父旅人からその制作の過程を逐一聞いておりましたので、この場所に落ち着いた胸像を見てもらいたかった、と改めて思います。その奥村氏の作品に「飛行家後藤勇吉」の銅像があります。勇吉は日本の飛行家の先覚者ですが、牧水の母校旧制延岡中学の後輩で、しかも牧水と同じ昭和三年に亡くなったと聞いております。飛行機に興味を持っていた牧水はそれを知っていたのでしょうか。歌碑や胸像を建てていただいたお蔭で楽しい想像が無限に広がってまいります。

最後に私事ですが、私の名前簞子(たかご)という字を書き竹を意味します。

よりあひてますぐにたてるあを竹のやぶのふかみにうぐひすの啼く

の牧水の歌は、牧水が大正七年にはじめてこの土肥を訪れて最初に詠んだものでございました。

沼津の松、土肥の梅、それに竹、三つそろって「松竹梅」とおめでたくなりましたところで、土肥町の益々のご発展、皆様のご健康をお祈り申し上げてご挨拶いたします。有難うございました。



歌碑と胸像は海にむかってたつ



歌碑のむこうには遠く神子元島が見える

延岡という街

延岡牧水顕彰会会長 川並俊一



歌人若山牧水が郷里を離れ旧制中学時代を過ごした宮崎県延岡市について紹介したい。延岡は古い歴史の町である。中世の豪族土持氏は十八代七百年にわたって延岡を治めたが、天正六



旧延岡藩内藤家所蔵の「天下一」の能面を使って毎年10月に城山で催される薪能

(一五七八)年豊後の大友宗麟との戦に敗れ亡びた。天正十五(一五八七)年豊前高橋氏入領し、延岡城の築城にかり町造りを始める。(二代限り)慶長十九(一六一四)年有馬氏備前より移封、町造りを継承し、塩田開拓を始める。(三代続く)元禄五(一六九二)年下野より三浦氏入封。(二代続く)正徳二(一七一二)年三河より牧野氏入封。(二代続く)延享四(一七四七)年内藤政樹が磐城平より入封、明治二(一八六九)年まで八代百二十三年間、代々学問武術に力を注ぎ、最後の政奉公は、漢学・儒学・武術の人材を養成、女学校「亮天社」を設立、教育に産業に偉大な功績を残した。

城下町としての長い歴史と文化を有する延岡は、市民にとって誇り高き郷土といえる。

若山牧水は、明治十八年延岡から十里山奥の東郷村坪谷に生まれたが、少年時代延岡に出て、県立延岡中学第一回生として卒業するまで八年間の青春時代を過ごす。牧水は晩年、往時を偲んで、次のような一文を残している。

「日向の國延岡町といひますと、今は相當開けてゐるさうですが、その頃は極くひっそりとした田舎町でありました。でも、内藤豊後守といふ御譜代の殿様のお城のあつた城下町だけに、寂しいけれど上品なところのある町でした。」(「金毘羅参り」より)

私は延岡といえは、古い歴史の城下町とこの風土に育った牧水、この二つを文化のシンボルと主張してはばかりません。

百年後の今日、牧水が全国によみがえって、各地に顕彰の風が起こりつつあります。それは、牧水が純粋率直に人と自然に接した生き方をし、多くの作品が万人をして青春を共有せしむる魅力をもつ稀有

の人だからだと思えます。

昨春、延岡市に九州保健福祉大学が創設され、第一回生五百人が入学しました。そして学生の憩いの場としてつくられた「青春の散歩道」に郷土の先賢若山牧水の歌碑十七基が建立されました。今後ここから多くの学生が街にあふれ出ます。全国各地から集まってきた若者にこの延岡の自然と風土と人情が、どのように映り、どのように影響していくのか。未だの風をはらむこの散歩道の行く先は、限りなく明るいものになるに違いありません。

なつかしき城山の鐘鳴り出でぬ幼かりし日さきし如くに
牧水



牧水が歌った城山の鐘は現在も1日7回時を告げる